

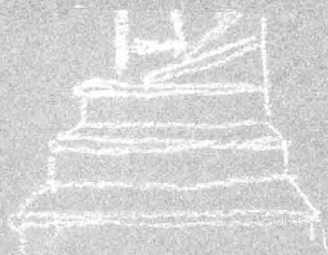
時の筏

ときのいまだ

加藤幸子



新潮社



時の筏 加藤幸子

時の筏

一九八八年一月一日印刷
一九八八年一月二〇日発行

著者 加藤幸子

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八

電話(業務部) 03-2661-5111

(編集部) 03-2661-5411

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

定価 一二五〇円

© Yukiko Kato 1988, Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛お送り)
下さい。送料小社負担にてお替えいたします。)

ISBN4-10-345204-8 C0093

時の筏*目次

第一章 詩人の館 7

第二章 泉のほとり 81

第三章 さすらい 141

第四章 ぬば玉の 203

エピローグ 253

装画 樋口千登世

時
の
筏^{いかだ}

一体何処から射して来るんだらう？

今迄の神様の処からぢやないんだぜ！

だつて僕の考へてゐた神様なんて、

もう僕よりずつと遙か下の方に

いらつしやるのなもの。――

加藤道夫「覺書断片」より

第一章 詩人の館

少女は急に海に潜ったときのような胸苦しさを覚えて目を開いた。天井に柱目とははつきりちがう奇妙な模様が映っている。少女はそれが何であるか確かめようと、しばらく上を凝視していた。胸苦しさは小さい獣のようにまだうずくまっていたが、彼女は慣れっこになっていたので気にしなかった。それはその他の日常的な感覚よりはずっと固定化されていて、たぶんこの世にあるかぎり続くものだとして少女は信じていた。何本かの黒い手がひよいひよいと浮かんたり消えたりしている。そのたびに嘲笑に似たささやき声が聞こえる。とうとうがまんができなくなつて、彼女は寢床に起きあがつた。頭のほうのカーテンが中央部で数センチめくれている。半熟卵の白身に似た弱々しい月光が縦に割りこんできている。その間隙に数枚のつたの枯葉がひよいひよいと現われて、幻灯のように天井板に映しだされたのだ。ささやき声は枯葉が風に揺すられてガラスとこすれあう音であつた。昼間から吹きはじめた風のせいで、明日の朝までにはつたの葉はぜんぶ吹き飛ばされてしまうだろう。そのあとには棘のような毛を密生させた蔓だけが残り、この大きな家の周囲を毛細血管のように這い回るにちがいない。

少女は身震いして肩のまわりに毛布を引きよせ、自分に言いよかせた。

へこはあたしの生まれた国へ

彼女は自分が慣れ親しんだ大陸とその友人たちの思い出をせきとめようと努力した。それら

の思い出は帰国して二年近くなるのに、まだ日に数回は洪水のようにおそつてきた。そして水の退いた跡に、黄土色の絵具を塗りかためたような乾いた風景画を何枚も残していった。なまなましい体験と密着しているこれらの記憶のほかに、ほんの時たまではあったが、異質の記憶が浮かびあがってくるものがあつた。それは塗りこめられたカンバスの底に果てしなく広がる白く寒々しい光景だつた。たぶん自分が異国におもむく前に生まれ、数年間育つた北の国にちがいない、と少女は直感した。しかし北の記憶は、激しい泥の奔流にいつもひとたまりもなく拭き消され、けつして定着することはなかつた。いつになつたらこの強烈な黄土色が薄れていくのか、少女には見当がつかなかつた。思い出は自分の意志とは離れた場所で、病気の熱のように自然に発生してくるのであつたから。

大陸からの長い旅を終えてこの家にたどりついた日、佐智と両親の三人はごつごつしたリュックを背負い、靴も頭髮も区別がつかないくらい埃にまみれていた。

「ここだよ。焼け残っていてよかった」と父親は喉に何かがつまつたような声で言つた。

「お父さんが育つた家よ」と母親はうつすらと涙を溜めて言つた。

ではほんとうにここなのだ、と佐智は思い、夢心地で周囲を見まわした。足もとには玉砂利が敷き詰められ、自分の背よりも高い石の門柱が三本、番人のようにいかめしく立っていた。中央の幅広い木の扉には嚴重に門がかけられていて、ほとんど開けられた形跡がなかつた。通用門はどうやらその脇の、比較的幅の狭い扉のほうらしかつた。黄褐色の小舟の形をした葉がバラバラと佐智の頭上にふりかかつた。

「八重桜の木よ。花の盛りにはとてもみごと。近所の人は桜屋敷って呼んでたわ」と母親が小声で言った。

八重桜の大木がのびのびと横枝を張りだしている下には、ぎっしりと混みあったつつじの茂みをのせた石垣が左右に連なっている。これらの光景は、金持に生まれながら実際には幸せではない少女を主人公にした典型的なおとぎ話の幾つかを佐智に思いださせた。

「何もかも昔のままで。さあ入りなさいサチ、私たちの家だよ」と父親が言って、通用門を重苦しい響とともに押しあげた。三人は中に入った。佐智は頭をふって、架空の物語をふるい落とし、まだ青味を残した芝生の広場の真ん中に、こんもりと半球状に常緑樹が植わっていた。その後背に全身から火を噴きだした西洋館がぬっと立ちはだかっていた。しかし焰と見えたのは、よろいのように壁をおおったつたの葉にすぎなかった。秋も深く、重なりあつたすべての葉が真紅に染まっていたのだ。屋根瓦はくすんだ小豆色で、つたが這い残したわずかの壁面から褐色に打ち放したモルタルがのぞいていた。そのあばただらけの素顔が盛りあがり旋回しつつ這いまわる蔓植物の下に埋められたとしても、白ペンキの醜く剥げ落ちた窓わくまで隠すことはできなかった。西洋館は十一歳の佐智の目にも、まったく時代離れのした骨董品に映った。その中に住んでいるのはただの人間ではあるまいという恐れと好奇心が、半々に彼女の中に渦巻いた。

両親は日本で住むべき家についての予備知識を娘に与える必要を、すっかり忘れていた。そのためこれらの印象は、三人が門の前に立ってから玄関に歩いていくまでのごく短時間に、一気に佐智の上に躍りかかってきた。折しも玄関のドアが開いて、かっぱう着姿の女たちが光の中に走り出てこなかったら、危く叫び声をあげていたかもしれない。初めて出会ったにもかかわら

ず、彼女たちが自分の叔母たちであることが佐智にはすぐにわかった。次の瞬間には、彼女は抱きしめられ、頭をこすられ、帰還への祝辞を両親といっしょに浴びせかけられていた。

「おめでとう、お帰りなさい」

「一郎兄さん、元氣そうね」

「佐和子さんもご無事で！」

「まあ、サッチャんの大きくなったこと」

「早くお入りなさい。おじいさまとおばあさまがお待ちかねよ」

三人は日の射してこないポーチをくぐり、薄暗い西洋館の内部へと押しこまれていた。

「おかあさん、ただいま。佐和子とサチですよ」と父親は佐智の背に手を当てて深く身体を曲げた。佐智もその真似をしたが、実際には外の光に慣れた目は、何も捕えることはできなかったのだ。徐々に闇になじんでくると佐智はかえってぎよつとした。廊下に立っていたのは、真白い髪を束ねて庇のように結いあげた一人の老婆であった。小さな体と膨らんだ大きな頭との極端な比率は、これまで佐智の会っただれにも当てはまらなかった。

「まあ、よかった……」とつぶやいて老婆は着物の袖で目尻をぬぐった。灰白く浮きあがった顔に幾条かの筋がついた。なつかしい微妙な匂いを佐智は吸いこんだ。彼女は天花粉をおしろいのようにはたいていたのだ。

「サチ、おばあさまよ。あなたが赤ちゃんのときこの家でかわいがっていただいたの」と母親が言った。

佐智は驚愕を隠すのに精いっぱい無言でおじぎをした。

「おとうさんはどちらですか」

「書斎であなたたちを待っていていच्छやるわ」

「では行ってきますよ」

父親は泥だらけの兵隊靴を脱ぐと、勝手を知った者にふさわしくすぐに左側の部屋に歩みより、ドアをノックした。母親と佐智も彼に従った。

「おう」だか「ああ」だか不明瞭な発音が聞こえた。三人は中に入り、「ただいま帰りました」と父親が代表で挨拶をした。祖父は窓ぎわの揺り椅子に深々と座って、笑いの片鱗も浮かべずに息子と家族を眺めていた。彼らの帰還を喜んでいるのかどうか、その外観からはわからなかった。「むむむ」と祖父は口の中でつぶやいた。「心配していたが、皆そろって帰れてよかった」

「おとうさまもお元氣そうですね。この前北京でお目にかかってから、何年ぶりかしら」と母が言った。

祖父は返事をしなかった。しかし佐智は覚えていた。彼女が八歳で、まだ戦争は終わっていないかった。祖父は中国の奥地で鉱物の調査をするために来たのだった。その折り数日間を北京の佐智の家で過ごしたのだ。

「むむむ」と老人はふたたび唸った。「こちらへ来なさい」

自分に言われたのだと気づいて、佐智は少し赤くなつて揺り椅子に歩みよった。祖父は近づいた孫娘を無器用に抱いて、膝の上に座らせようとした。祖父の膝は三年前と同じように骨ばって安定が悪かった。八歳だった佐智は北京の洋車の上で祖父の膝に載せられたまま、車が目的地に着くまでお尻の痛さをがまんしていたのだ。

「おとうさん、サチは来年六年生になるんですよ」と見かねて父親が言った。

「そうか、もうそんな年か……」

驚いたように祖父は佐智を放した。

「あれで、ぼくたちに気を遣ったつもりなんだ」と廊下に出て父親が言った。

「おじいさまは学問一途の方だから……」と佐智に説明しながら、母親はくすりと笑った。

でも息子や娘が合わせて五人も生まれたのに、と佐智はいぶかった。

戸外では相変わらず狼の遠吠えのような風が吹きすさんでいる。少女はもう一度眠りにつこうと試みたが、今度はある気がかりなことがわきおこって、それを妨げてしまった。彼女はふたたび床の上に起きあがって、隣りに並べられた布団を見た。両親は石像のように身動きせずに眠りこんでいた。二人とも床に入るが早いのか、もう寝息をたて始める。ときには唇をだらしなく開いて、豚の鳴き声みたいなびきさえかく。自分のように胸苦しい獣をかかえることは一度もないみたいだ。悪夢にうなされて、額に冷たい汗をかいて飛び起きることもない。昼間の母親は口ぐせのように少女に向って小言の連発だった。父は何もぐちをこぼさないが、やせた鳥みたいに飛びだした肩甲骨を見ると気がめいった。いつも二人のあいだで守られていながら、少女は孤立感でいっぱいだった。夜になるとその感情は特に強まった。眠っている両親を横に見ながら、少女は地球の果てに追いやられているような寂寥に浸されるのだった。

ガシャンと何かが庭で倒れる物音がした。廊下をねぐらにしている飼犬のジャックが低く唸っ